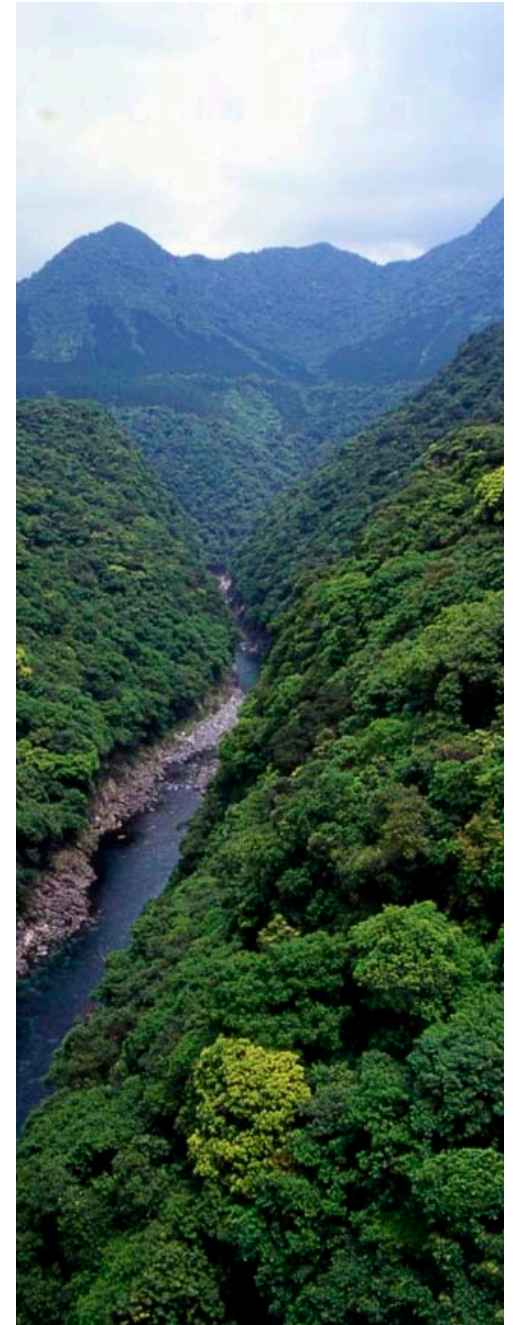




Focus on Sea Side

#01, 太田祥平さん
#02, 榎田三隆さん

2005年の3月に創刊しましたWEB-LUEも
お陰様で第6号を発行することができました。
コンテンツのひとつであるローカルプレスに創刊当時から協力していただいた
国内外のガイドをご紹介していきたいと思えます。
掲載するのは、取材が行えた方となりますので、
これから毎回、何名の方を紹介できるかわかりませんが、
素敵なガイドさんばかりなので、是非ご覧下さい。





#01 太田祥平さん

サザンクロス号(エスパシオ)

2006年4月、取材で訪れたモルディブで、祥平さんから「突然ですが、今年の11月末でモルディブから引き上げることにしました」という事実を直接聞いた。渡航前にダイビング雑誌の編集部から、「今回は太田さんをクローズアップして取材して欲しい」という企画の意図がそこで初めて読めた。

モルディブでは、女性のインストラクターは長続きするが、男性はなかなか長期で活躍することがない。そのなかで太田祥平さんは1994年から2006年までモルディブの海の見つめてきた日本人男性インストラクターとして稀有な存在だった。リゾートダイブの全盛期、1998年の白化現象、ダイブサファリの出現、2004年の津波など、モルディブの海の歴史を知る貴重なダイバーのひとりだった。

私自身、祥平さんには少し特別な思い出がある。祥平さんは1994年に、私は1995年にモルディブを訪れ、ダイビングガイドしてリゾートで働いていた。違う島ではあったが、同じ日本人男性ガイドとして祥平さんは気になる存在であった。私がガイドをしていたビヤドゥアイランドのハウスリーフでホームラゼが見つかったことがあった。当時、バンドスで働いていた祥平さんは、その珍しいハゼの撮影のためにビヤドゥにやって来た。同じモルディブの海で、意欲的に撮影している同世代の祥平さんが気にならないわけがなかった。

それから祥平さんはサザンクロス号というダイブ

サファリをスタートさせ、私はフリーランスフォトグラファーとして独立した。2003年に初めてサザンクロス号の取材の依頼を受けた。サザンクロス号に乗り込んだ時に驚きは忘れていない。規格外のダイブサファリを眼の当たりして、祥平さんの成功を羨ましく思った。また、ひとりのガイドとしてモルディブの海を見つめ続けている祥平さんをリスペクトした。それから彼のダイブサファリの、様々な生き物を見せてもらった。南マーレ環礁しか知らなかった私にとって、各環礁を巡るダイブサファリは、モルディブで撮影を続けていく様々な可能性を示唆してくれた。そして私はそのひとつひとつを大切に撮影していった。

*

祥平さんはモルディブの海を撮影するカメラマンでもある。本当は毎日、自分の好きな海でいつでも写真が撮影できるとしてダイブサファリを始めたそうだが、しかし、あまりに忙しくて、ほとんど撮影する機会がないと残念がっていた。今回の取材で祥平さんのダイブサファリに乗船するのは4回目だが、いつもフィルムを大量に消費してしまう。それは、祥平さんによるダイブサファリだということに関係していると思う。やはりどこか、フォトジェニックな風景の広がるダイブポイントが選択されている。カメラマンは、自分の視点で写真を撮る。それは誰かにこんな風に見て欲しいという願いも込められている。祥平さんは長年培った経験から、モルディブの海を良い風景を見せてくれる。それは、彼

がレンズを通して表現したかった世界だと私は思っている。別に特別なことをするわけではない。ただ海中で彼の後をついていだけだった。

マディバル7に乗船する前に、楽しい夜があった。ソレイユの鈴木希世子さんとブルーシャーク2の清水和美さんとマイマリアナのカオリータと私が祥平さんを囲んで海の上で宴を催した。アイランドサファリ号の赤間大介くんは遠くの環礁に居るということで残念ながら参加できなかったが、現在モルディブのダイブサファリで活躍している日本人メインガイドが一同に介した。祥平さんがモルディブの海を去ると事実を聞いたばかりなのに別に口にすることはなかった。私が期待していた海やダイビングポイントの魅力、今後のモルディブのダイビングなどの話題も一切でなかった。ただ、笑い、騒ぎ、楽しい酒を大いに飲んだ。

みんなはダイブサファリという過密スケジュールの合間をぬってやって来た。ライバルであり良き理解者でもある祥平さんのために。そして同じ時代にモルディブの潮の揉まれ、ゲストのためにマンタやジンベイザメといった大物の出現に翻弄された仲間のために。祥平さんが、モルディブの海から去ることを聞いたとき、私はとてもショックだった。それはモルディブを訪れる理由、魅力のひとつを失うことだった。

4月16日2006年 マディバル7のキャビン2にて
鍵井靖章





#02 榎田 三隆さん

屋久島マリンサービス YMS

榎田さんと私(鍵井)は伊豆の八幡野ダイビングセンターの先輩後輩という関係でもある。実際にガイドとして働いていた時期が違うために面識はありませんでしたが、2004年、都内のある某所で偶然お会いしました。プロのダイバーとして、お互いに会いたくなかった場所だったのです……。連日、あの閉鎖された空間で共に過ごしました。業界では「〇ャンパーズ」と呼ばれ、その出会いはとても硬い結束(?)に繋がり、それ以来、お付き合いをさせて頂いています(笑)

屋久島の海のこと

鍵井(以下鍵) いつ頃、屋久島に移られたのですか？

榎田さん(以下榎) 8年前です。※以下敬称略

鍵 きっかけは何だったのですか？

榎 みんなが良く言うほど、移住に対して「強烈な憧れ」があったわけではなく、ただ何となく行ってみたいという感じです。初めて屋久島の海のなかを覗いてみたときに、ダイバーが全然居なかったんです。それはとても私にとって大事なことでした。その頃は、海から手ぶらで上がってくると、「何も獲らずに何がおもしろいんだ？」と本職の漁師さんに言われていました(笑)。そんな時代だったんです。私自身は、頑なに「魚突き」はしなかったです。後々レジャーダイバーの密漁の実績を作るのは大問題ですし、僕は屋久島でレジャーダイビングをしていくんだという自覚がそうさせたんですね。

鍵 獲らないことが、屋久島で生きていくための手段だったのですね(笑)。他に屋久島の海の魅力は何ですか？

榎 基本的に何でもありです。伊豆の海も沖縄の海のあるんです。この海は「日本の海の縮図みたい」だということですね。でも、言いようによっては中途半端なのかな(笑)。陸にしても北海道から沖縄までの気候があるような島ですからね。

鍵 例えば、どのようなことでそう感じられるのですか？

榎 例えばタカノハダイとシテンヤッコが同じ景色の中にいたりします。普通の景色を見ているはずなのに、何かちぐはぐなところに気付かされます。そういうところに気付けば、実はさらに楽しくなったりもします。また、隣のポイントに移動するだけ、沖縄から伊豆へ雰囲気になったり。その逆もあります。景色の連続性というのでしょうか、それが楽しみのひとつです。伊豆のような岩場がゴツゴツした殺伐とした風景のなかに沖縄のさかなが泳いでいる。そんな組み合わせがとにかく面白いんですね。

鍵 屋久島の海は多様なですね。

榎 また、ある岩場のポイントでは、コブシメの産卵がいつも行われています。屋久島の海ではコブシメが産卵してない時期がないというくらい、実は産卵しています。以前は初夏がシーズンのピークだったのですが、最近は少しずつズレているように思えます。2000年、5月に雑誌の取材で人気写真家・T砂氏が来られたのですが、「あれだけの数のコブシメが一箇所のいるのは珍しい」と絶賛されていました。30~40匹ほどだったのですが、当時はそれが当たり前だったのです。

鍵 30~40匹ですか？それは凄い！！

榎 そうですね(笑)。残念ながら、今はその数も減りました。現在は別の箇所で十数匹の群れが見られます。実はその時、コブシメがあまりにも接近するため、T砂さんはカメラを持って後ずさりしていました。あの光景は今思い出しても笑えます(笑)。そんなフレンドリーな出会いは現在も変わっていないのですよ(笑)。

鍵 やはり、行かなくては……(笑)。

榎 屋久島の海は人(ダイバー)がいなから、本来、好奇心の強い魚はこっちに来ます。本当に臆病な魚はダイバーにとって良くも悪くも、人馴れしていません。そこがこの海の良さでもあります。しかし、最近海の中でも他のグループのダイバーに出会うことが多々あります。以前に比べるとダイバーの数は増

えました。と言っても他のエリアに比べるとまだまだ少ないですが……。そして常に新しい発見というか出会いがありますよね。それだけまだ未開の海であることの証明でしょうし、新しいショップさんが入ることによって新しい屋久島の海が見つかるんだと思います。まだ新しいポイントというのも出てくるでしょうし、当然またさらに新しい出会いが隠れているということですよ。考えるだけでワクワクしてきます。と、同時に海への関わり方をも少し考えなければいけない、と今思っています。ここ最近、多少は屋久島の知名度が上がって、ダイバーが増えるのはいいと思うのですが、その反面、勝手な言いようですが、静かな海のままにいてほしいという気がしないでもありません。やはりダイバーが入ることによって生物やら海自体にも何らかの影響はあるわけですからね。人の少ない海というのはやはり自然の状態に近いということなんだと思います。商業的には全くもって、いただけないことですが(笑) 何しろ、僕自身が人のいない海を独占するのが好きなので、いまでも人のいなそうなポイントに向かって車を走らせたり、泳いでいったりする傾向がありますね(笑)

そんなときに「そーいや川の中なら誰もいないじゃん」と気が付いて試しに潜り始めてみたんです。





川への興味

普段、車で走っている県道沿いに夏休みになると子供が遊んでいる川があるんです。道路を挟んで海と川の淵が繋がっている場所なんですけど。その上にはブランコ(ただのロープですけど)が下がっていて、子供たちが夢中で遊んだり、魚やエビを獲っています。それを見て「面白そうだな～」と思いたち、子供たちが居ないシーズンオフに潜りに行ってみたら、これがとても面白かったのです。1歩2歩と踏み入れるとまず、ハゼが寄ってくる。他の魚も至近距離で僕を中心にジリジリと…。とにかく周りにいるものが全て寄って来んです。餌付けしているわけではないんですよ。魚たちの視線の先はみな同じ、その中心に居る私に向けられている。それが堪らなく楽しかったのです！(笑)。その後、タンクを担がないで、もっと浅場にスノーケリングに行ってみました。場合によっては、川底にお腹をズリズリして、行ってみるとこれがまた楽しかったのです。もちろん、海に比べれば、魚の種類はすくなくて、一回で見られるのはたいてい片手でもおつりがきます。クロヨシノボリ、ゴクラクハゼ。ポウズハゼ、ナンヨウポウズハゼ、オオウナギ、アユ。ラッキーだったら枯れ枝のような川のヨウジウオにも会えます。またエビがクリーニングもしてくれます。川ですから、大物との遭遇もまず期待できませんが、足繁く通っているうちに、いろいろな行動が見えてきました。それはハゼの「共食い」や「縄張りをめぐる喧嘩」など。活性が高いときには、気の強いヤツは私たちの指も噛んできます。すごいでしょ！ほんの小さなエリアでの観察になります。これまで経験した川のなかでもそこは特別な場所でした。とにかく、魚を見ていることも面白いし、魚に見られているという逆転された感覚も面白いのです。

川を潜るようになって、「水が楽しい」と思いようになりました。ある程度大きな川で、下が海水、上が淡水のその境界に自分の視線を置いてずっと泳いでいくと、

雲海を逆さに見ている感じ、目の前の自分を中心に雲海を掻き分けながらいくことができます。言葉では説明が難しいですが、私は一番これが好きです。マスクのレンズの枠内で、水の流れ、動きがとてもキレイに見えるんです。あとは、自分の目の前に流れ込みがあると、泡が躍っているのが見える。上から見るとただ、水がかき回されているだけですが、水中からだ水面から空気を含んだ泡が水の流れを教えてくださいます。

また、海と違って波がないので、水面の向こうが本当に良く見えます。場所によっては水面を透過して屋久島の森が見えるのです。そんな経験をしていくと、魚を見る以外でも、水の中でいろんなことに気付くようになりました。

*

このような川に行くプランは、その都度ゲストと話し合ったのなかで計画します。到底、万人受けするとは思えないので(笑)。普通の海のダイビングとは違い、一対一で生き物と向かい合う時間が長い。これまでに経験されたゲストの方は『いいね、いいね！』と、ポーズの注文でもできそうなくらい密接な関係を築くことができました」と嬉しそうに話してくれました。また川の後に、海に潜ったゲストは「魚の顔つきがどう？とか、今度は○○の行動をしている時に写真を撮りたい」とかいうリクエストが増えました。とにかくゲストのみなさんは魚を「観る」ようになりましたね。これはとても良い相乗効果になったと思っています。ひとつひとつ丁寧に見ていくと、普通種が楽しくなってくる。そうすると、どこに行っても楽しめるようになる。かわい魚や珍しい魚も、もちろん楽しむのですが、「その他大勢のモノもちゃんと楽しく見られるようになった」と、多くのゲストの方が話してくれました。これはとても嬉しいことです。今は川に大変興味があります。いつか、スクーバだけにとらわれない、水を接点とした手軽で楽しい遊びも紹介していきたいです。

住人・榎田さんから見た屋久島の陸の魅力は？

島での生活に慣れてきてからは、大袈裟な森には行かなくなりました。有名どころでは白谷雲水峡に行くくらいです。住んでいて、よくよく思うのですが、屋久島ブランドを背負っているものばかりが素敵な場所ではない、ということです。通り道も実は楽しい。キレイなもの、小さな生き物もたくさん見つかります。車を降りて、10分くらいで会える景色が好きです。敷居が低く、子供(娘たち)と行けることが私が行きたくなる森の大前提なのです。

：榎田さんに聞いた
：屋久島に関するお薦めの本

：世界遺産 屋久島の撮り方(小学館)

：三好和義著

：まさに屋久島の撮影マニュアルであり、同時に非常に良くできたガイドブックでもあります。本書で紹介されている撮影スポットは、有名どころはもちろん、身近な景色の中で屋久島のステキな顔を見られる場所です。そんな屋久島らしさを見つめるヒントが本のいたるところに隠れています。

：カメの息つき(新風舎)

：アベカオリ著

：かまなくても島の普通の風景が見えてくる気がします。島の普通の中にある魅力ある景色がこの本に載っています。観光地として屋久島、自分が住む島として屋久島はもちろん、ある意味、本当の屋久島本かもしれません。この本のタイトルは、榎田が著者に教えた島の楽しみ方です。

#02 榎田 三隆さん

屋久島マリンサービス YMS

www.web-lue.com

Focus on Sea Side
Web-lue 2006. Summer

Information Link <http://web-lue.com/local/top.html> click! 情報HPへジャンプ